

海外研修報告：

## アメリカ有名5大学図書館を訪問して

豊橋図書館 成瀬 さよ子

私は2004年9月10日から約1ヶ月間、職員の海外研修制度を利用してアメリカのハーバード大学・プリンストン大学・ミシガン大学・カリフォルニア大学バークレー校・ハワイ大学マノア校を訪問してきた。

目的は2つあり、第1の目的は『幻ではない名門校＝東亜同文書院大学』が確かに存在したことを、愛知大学に引き継がれた資料を掘り起こすことで実証し、さらにアメリカにおける研究者達に東亜同文書院への関心を呼び起こす事ができればと大胆な目的を抱いた。既に数年前から「東亜同文書院大旅行誌」を調査していたので、検索ツールをWeb上に公開した。(2004年3月)さらに『東亜同文書院関係目録』の冊子体を作成することを自己に課し、渡米3日前に完成させた。これをお土産として、5大学のアジア図書館のライブラリアン及び日中近代史研究者に配布することとした。第2の目的は、愛知大学図書館の今後のあり方を模索することであった。2004年4月より業務の一部がアウトソーシング化され、後継者不足と人手のかかる図書館ガイダンスのあり方が問題となっていた。

### 1. 東亜同文書院について

最初の訪問校であるハーバード大学は、全米で最も古い伝統を持った名門私立大学である。世界で最も大きい図書館の1つといわれているワイドナー中央図書館は、一般には公開していないので、学外者は容易には入館できない。図書館内では写真など一切禁止。出口にはブックディテクションがあるにもかかわらず、利用者全員の鞆・袋物の中身を厳格に調べていた。かなり閉鎖的で敷居が高いなと感じたが、イエンチェンやロースクール図書館職員は皆親切であった。とりわけフェアバンク東アジア研究所では、大変なもてなしを受けた。私が訪問したときには、既に4冊の分厚い図書が机上に準備しており、所長のWilt Idema教授は、中国文学の研究者であったが私の作成した『目録』を欲しいと言われた。続いてランチに招待され、アメリカ各地から参加しているフェアバンク研究者の前で「日本の愛知大学から東亜同文書院について研究しているライブラリアンが訪問してくれました」と副所長のRonald Suleski博士が紹介してくれた時には恥ずかしくて小さくなっていた。この研究者の中に『知の帝国主義：オリエンタリズムと中国像』で有名なPaul A. Cohen教授もいて、李春利先生が愛知大学と東亜同文書院の関係や、『目録』の事を詳しく説明してくださった。(写真1)

ミシガン大学では、調査したい事項があった。1960年以前に既にアメリカでは『支那省別全誌』(東亜同文会)をマイクロ化してUMI社が販売していた。ミシガン大学収蔵の図書を原本としたことまで判明しているので、いつミシガン大学では収蔵したのかを知りたいと考えていた。(UMI社は、1938年創設当初ミシガン大学内にあ



写真1

り、学位論文の複製を主とし現在はProQuest社という。) ミシガン大学は、アナーバー全体が学園都市となっていて、北・東・中央・南とキャンパスが複数ありキャンパス間はスクールバスが走っていたが、私は歩いてSouth Campusの保存書庫まで出かけた。『支那省別全誌』は、すぐに閲覧できタイトルページに1949年9月25日の日付が記されていた。(写真2) アジア図書館長の仁木賢司さんにも確認したが現物に記載されている方が珍しいことであると言われた。ミシガ

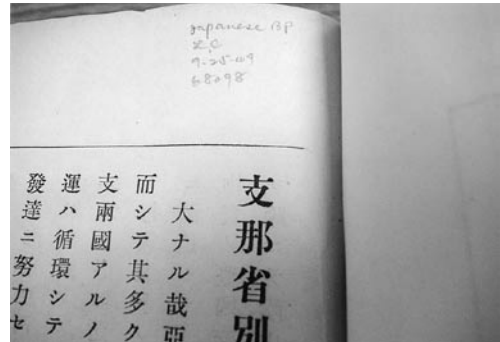


写真2

ン大学では、1947年に全米で初めての日本研究センターが設立されている。アメリカで最も古い歴史を持つ日本に関する研究機関が、いち早く東亜同文書院の学生たちが書いた手書きの卒論を基に出版した『支那省別全誌』を購入し、また他機関から要求があつてマイクロ化していたことは特記するに値しよう。

私はこの他すべての図書館でいくつかの所蔵調査をしてきたが、残念ながらコピーを取ることが出来なかったため、帰国後改めて調査した。この調査結果は予想外であった。私が作成した『目録』の中に全く載っていない資料が4点カリフォルニアとハーバード大学で発見された。国内の大学や研究機関では全く発見されなかった資料である。また他に6点本学にはない資料があった。それにしてもさすがハーバード大学は、中国研究においては全米一の収蔵冊数(62万冊)を誇る大学である。最も多い調査結果であった。

5大学比較	創立	蔵書 万冊	日本語 万冊	東亜同文会・ 東亜同文書院 刊行物 件	支那経済全書 1907-	支那省別全誌 1917-	中日大辞典 1968・1987
ハーバード	1636	1400	28	62	所蔵あり	所蔵あり	1987
プリンストン	1746	500	16.3	26	所蔵あり	所蔵あり	1968
ミシガン	1817	780	25.5	45	所蔵あり	所蔵あり	1968・1987
UCバークレー (UC全体)	1868	900 (2980)	40	47	所蔵あり	所蔵あり	1968・1987
ハワイ	1907	320	?	14	所蔵あり	3巻のみ	1968

帰国後、カリフォルニア大学のサンタバーバラ校(訪問校ではない)のJoshua Fogel教授(有名なこの先生の著作物は、日本語訳も複数あり『内藤湖南ポリティックスとシノロジー』等本学に13冊の図書を所蔵していた。)から『目録』の送付依頼があつたし、オハイオ大学のShao Dan教授からも『目録』と「東亜同文書院に関する入手可能なリスト作成」依頼があつた。予想を超える東亜同文書院への関心の高さであり、訪米効果は嬉しいことに今後も続きそうである。

## 2. 愛知大学図書館の今後のあり方

### <ガイダンス>

ハーバード大学イエンチェン図書館では、ガイダンスは年1回行っているのみで、図書館側が熱心に行う必要がないとの答えだった。「学生は勉強するために大学に来ていることを熟知し

ている。」と言われた時には正直はっとした。

ハワイ大学では、ライブラリアンの講義を見せてもらった。「Bibliographical and Research Methods Japan」という院生の課目でオンラインリソースを使った第10回目のTokiko Bazzellさんの授業だった。担当教員のLawrence Marceau教授も一緒にアドバイスや質問をしていた。内容的にはそれほど目新しいものではなく本学でも行っているデータベースの内容の説明や使い方の実習であった。ただし、単発ではなくシステマ的に行われていること、また最終目的は修士論文作成のためテーマに沿った参考文献一覧を提出させることで、図書館側のねらいと授業の内容が一致していてすばらしいと思った。我々が図書館ガイダンスの中で行っている資料やデータベースの使い方を、目的を明確にした体系的な授業に組み込むというのは可能であろうか？総合学習の中で、それぞれテーマごとに学生を集め、毎回図書館の資料やデータベースを使って回答させていく授業は面白いと思われる。例えば、「東亜同文書院」についてならば、大旅行誌の検索データベースから本文にアクセスする。文中の分からない言葉・人名・地名・歴史的背景等の調査をする。図書館職員も一緒に参加し、学生は毎回発表し報告書を提出する。最終的にはどのような資料を使って何について調べたのか一覧表を作成させる。これを図書館としては、主題ごとにまとめパスファインダーを作成する。図書館の資料やデータベースを使わなければ授業が成り立たないというような方法であれば、図書館はもっと必要とされる場所となる。学生が早くから勉強方法を身につけることは、その後の学生生活を有意義なものにできる。図書館職員にとっても主題知識を蓄積出来、カウンターでのアドバイスに役立つ。職員数は減員されたが、今後もより効果的なガイダンスのあり方を模索し続けたい。

#### 《お詫び》

前回の『韋編No. 29』にて継続を明記した「東亜同文書院関係目録」は、あまりに膨大なため（全61頁）2004年9月に限定100部の冊子体目録として作成（既に品切れ）しましたので、『韋編』では継続しません。悪しからずご了承ください。

### 中華人民共和国教育部からの寄贈図書

中国政府より、愛知大学の中国語研究や教育に対する支援として、中国語図書 1000 冊が寄贈されました。内容は小・中学校の教材、文学・語学、辞典、録音資料など多義に渡っています。豊橋図書館と名古屋図書館各 500 冊を受入れ、展示しました。

